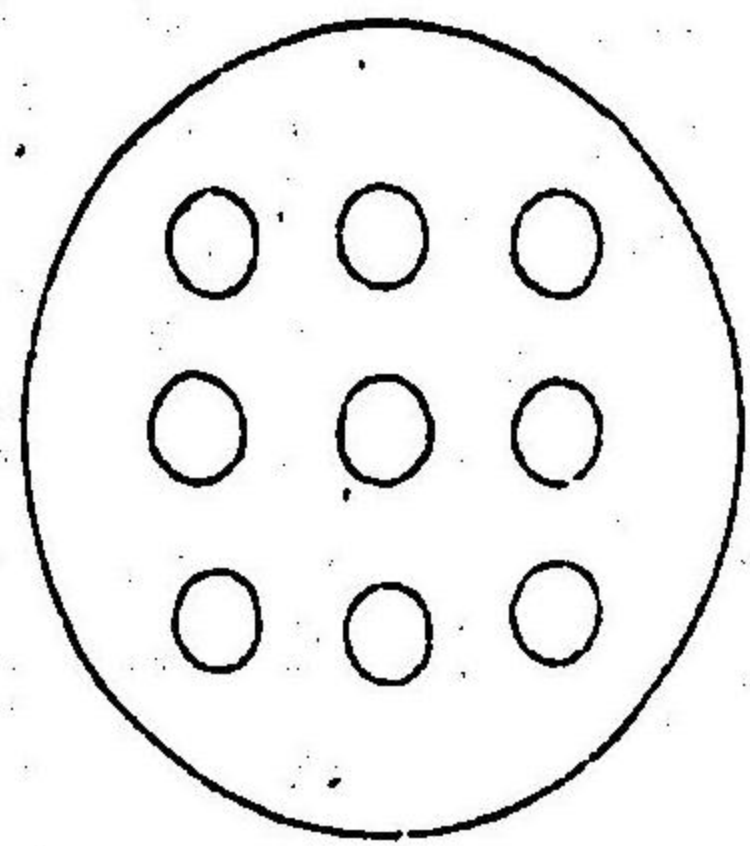


加之吾人の身體は意志によりて直接に之を支配し得と雖も外界物は吾人  
人身の運動により間接に之か位置を變易せしむることを得るなり是故に  
吾人は先づ外物に對して身體を以て吾か内界となす而して此時に於ては  
吾人の心に感ずる諸種の感覺は總て之を外界の空間に於て思考す、換言す  
れば本來吾人の精神に感ずるものをも恰も外界に在るか如く思惟する  
なり譬へば色彩若くは音調の如きは之を吾人の心中に感ずるものなり然  
るに吾人は之を外界物體の性質に屬するものとし己れの心中に起りしも  
のとなさず之と同じく吾人が苦痛を感ずるは皆己れの精神中に於てする  
ものなるを吾人は爾く思惟せず手足顔面の如き或局所に於てするが如く  
感ず是れ皆精神中に於てするものを外界に移して考ふるものなり  
然れども其再生の場合に於ては稍之と差異あり即ち吾人が直接に見聞す  
るにあらざして心中に於て曾て此様の机を見たることあり彼様の音楽を  
聞きたることありと追想するときは概念の原因が外部より來りしにあら  
ずして己れの心中に於て再生したることを認む隨て再生によりて得たる

ものは之を外界に移して思考せんとはせず  
斯く心中に於て思考するに至れば自己は果して如何なる位置に在るか  
思想も漸く正確に近づくものなり而して再生の場合に於て吾人に感情を  
惹き起さしむるもの外界に在らざるを知らば其原因吾人の腦中にあり即  
ち吾人の心中に於て再生するものなることを覺るなり是に於て外界の物  
體と内界の自我とは各特別に存在すとの念漸く確實となり自我は外界の  
物體に對して存在するものなりと思惟するに至る而して又之と同時に外  
界物體の思想を生ずるものなり  
而して吾人の智識尙ほ開發し我が心理の顯象も仔細に之を研究するとき  
は別に此の如き一種殊別の體あるに非らず我か心象を離れて別に我なる  
ものゝ存在するなきことを知るなり此の如くして我の思想は愈確實なる  
ことを得

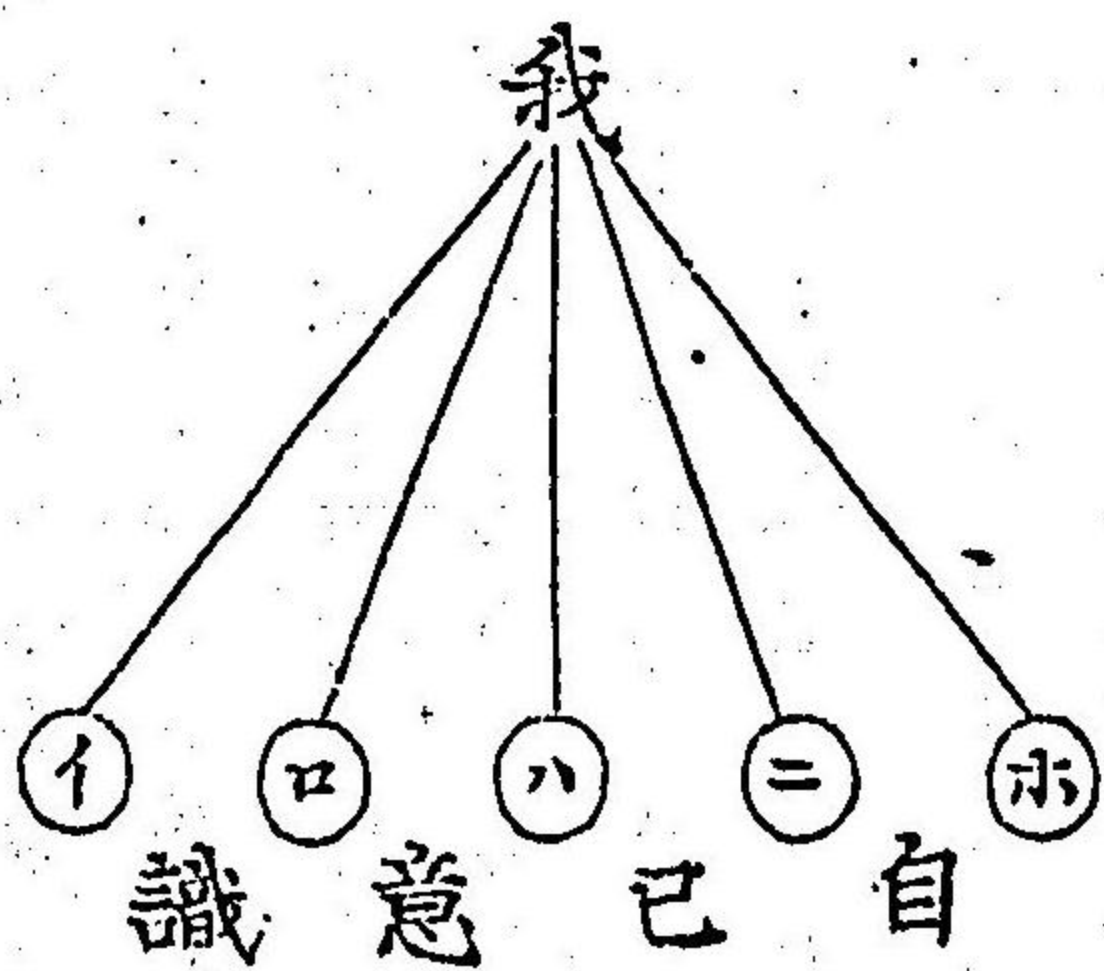
吾人々間は常に他人の言語動作に注意し其言語動作はよく外界の事情に  
適應することを發見す而して是れ亦皆吾人と同じく其中に我なるものを

有することを判す斯くして吾人自身の自我なる思想を他人に移して他人即ち汝なる思想を生ずるに至る  
 稍智識を有し理解力の發達するものは必らず皆我なるもの、思想を有す然れども仔細に之を考察するときは吾人の心裏には個々特殊の心象の外一物も之あることなきなり譬へば左圖に示すが如く



種々なる外界物体の映像相集りて始めて吾か意識を成す若し吾人に映像なくんば焉んぞ吾人の意識なるものあらんや而して吾人の心象は時々刻々に變易して暫しも止むなきものなり此の如く吾人の心象の斷へす新陳

交代するにも關はらず吾人は我の生より死に至るまで同一不變のものたるを知る之を歴史的の自我(Historical-ego or Imperial-ego)といふ故に歴史的の我とは吾人か精神生活を總て包括するものなり此我は即ち自己意識の連續なり之を換言すれば即ち歴史的の自我なるものは箇々の自我相集りて形成せられたるものにして人間の一生中種々の時期に於て造くられたるものなり圖を以て左に解示すべし



(イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ)等は各其當時に於ける自我にして時の異なるに隨て自我の状態亦異なるべし斯く意識は時によりて變化し吾人一生中は其時々を隨て精神の状態一樣ならざるものなり然れども吾人の生より死に至るまで自我なるものは依然として異なる所あるなく終始一貫するありて此に純粹の自我なるもの思想を造る即ち純粹の自我は歴史的の意識以外に全く獨立するものにして如何に精神の状態變化するも決して其影響を蒙ることなし然れども純粹の自我は勿論箇々の自己意識を距れて存在するものにわらず畢竟箇々の意識は一の自我が種々の形態に現るゝに過ぎざるのみ譬へば純粹の自我は一般の概念の如く箇々の物體に通じて適用するを得然れども概念は決して箇々の物體を距れて存在すること能はざるが如し自我の思想も之と同じく箇々の意識を統一するよりして生じ來るなり又社會上の意識よりして我等なる思想を生ずるものなり社會には(イ)なる人あり(ロ)なる人あり又(ハ)なる人あり是等幾多の人相集りて以て之を形成す是等の人は皆各意識を有す而して是等意識の存在よりして此に我等な

る思想を生ず

社會を組織するは人間の最も大切なるなり何となれば吾人は社會の上に於ては箇々別々に生活するよりも一層大なる心の能力を發達せしむることを得ればなり又社會を組織すれば吾人に高尚の事業を營まんとする奮發心を起さしむるものなり單に一個人なりとせば其事業も隨て小にして且利己主義に傾くべしと雖も社會をなすに於ては高尚なる働き高尚なる自我を生ずるに至る

古來の大事業は大抵皆其團體より生ずる意識よりして生じ來りしものなり或は政治上の意識若くは宗教上の意識若くは國民の上の意識の如き大なる團體を造り其上に浮ぶ所の意識よりして吾人は大事業を成就するに至るものなり

人類なる思想の如きは意識の最も廣大なる範圍に附着したるものなり内界或は外界に生ずる事實を吾人の心中に表彰するもの之を意識と稱す而して自己なるもの、表彰は之を自己意識と云ふ即ち自己意識は唯反省

的作用によりて我を意識の中に表彰したるものなり而して我心象を取り之を自己に歸する所以の作用は之を自覺(apperception)とす

以上の如く心は己れを見ると見らるゝとの二種の働きをなす初め吾人の外界物體を経験するに當りては吾人の心は皆物體に奪はる譬へば吾人が演劇を観ると其趣異なるなく吾人の心は皆舞臺上の演藝に傾注し全く自己なる思想を失ふ然れども自己意識なるものを生ずるに至れば自己のことを思ひ己れの意識の状態を自我に歸着し是に於てか自覺を生ず自覺は實に最後に生ずるものにして未だ最も高尚なるものなり

自我なる思想に就ての講述は以上に止め以下理想に就て一言すべし理想(ideal)は吾人の最も高尚なる概念の一にして現世界に存在せざるものを想像せしものなり即ち眞善美の範圍内に於て吾人の思想の及ぶ丈け最も完全なる状態を考へて以て吾人のすべての事柄に於ける進歩の目的となすものなり

凡そ吾人の智識は経験を積み思想を練りて始めて進歩發達するものなり

FO

三

然れども吾人の經驗は決して無限なる能はざるが故に吾人の思想の及ぶべき範圍も亦自ら制限あり故に吾人の思想は如何に進歩するも到底吾人をして満足を表せしむる能はず

以上は智識に就て言ふものなり善に於けるも亦た之に異なる所あるなく如何に美德を備ふる君子人なりと雖も決して完全無缺なりといふこと能はず

美の範圍に於ても亦同じ天然の風光は往々吾人をして其美妙に驚かしむることわりと雖も其壯景美觀も決して永久に存在すること能はざるものなり

是に於てか吾人は自然界に於ける醜を排して美を集め之をして恒久不變ならしめんと欲すと雖も如何せん吾人の能力は自ら制限せらるゝありて到底十分に其望を遂ぐるに能はず然れども亦吾人は此不完全の状態を以て満足するものにあらざるが故に眞善美の範圍内に於て成るべく完全に近かんことを希望するものなり吾人は現在の境涯に於て到底之を實行

すること能はずと雖も吾人の想像力によりて至善至美且至眞のものを其心中に構築し來り假令幾千万年の後と雖も能ふべくんば之を實在世界に建設せんと欲するものなり

凡そ理想とする所高尚ならず且其理想に向て進まんとするの氣象薄弱なれば智力を啓發して完全の域に近かしむること能はず又卑賤の業に安んじて更に高尚の志操を持つることなく終に人たる所以の道を失ふに至らん故に高尚なる理想を有し之に進まんとことを力むるは是れ人生に缺くべからざる心理的作用なり

物は凡べて進歩開發し能はざるものなく而して進歩開發は理想に向て進まんと欲するの思念より起るものなり故に理想は百般の事物に存在せざるなく理想は實に進前の目的なり

## 第一章 感情

感情は智力と其性質を異にすと雖も決して反對するものにあらず寧ろ互に親密なる關係を有するものなり然れども吾人はよく此二者を識別し得へし而して其最も單純なる原素は快樂苦痛の感情是れなり

快樂苦痛の二者に就ては議論紛々として未だ其何れにも歸着せざるが如し或は曰く苦痛は實在するものにして快樂は其反面的のものなり、換言すれば、快樂は實在するものにあらず、即ち苦痛ならざるもの、謂なりと或は曰く快樂は實在するものにして苦痛は其反面的のものなりと或は曰く快樂苦痛共に實在するものなりと今是等の說に就て聊か研究する所あらん予を以て之を觀るに以上の諸說は皆共に正確のものならざるが如し、抑も快樂苦痛は決して一定不動のものにあらず此二語は元と相對の狀を表彰するものなり既に苦痛なきか快樂は決して世に存することなく既に快樂なきか苦痛は決して吾人の感ずる所にあらざるべし譬へば猶ほ上下、明暗、陰陽といふが如し上あるが故に下あり明あるが故に暗あり陰と陽と亦た然らざるなし快樂苦痛も亦た斯の如く共に相對して存するが故に甲は快

最も草純なる感情

樂として感じ乙は苦痛として覺ふ假令苦痛となさざるも快樂ならずとなし又快樂となさざるも苦痛ならずとなすあり是に於てか此二者元と一定不動のものにあらざるを知るべきなり只比較的之を説明するときは快樂とは身神の二者に於て吾人が満足を感じるか或は苦痛を覺えざるかの状態を言ひ苦痛とは身神の二者に於て吾人が満足を感じざるか或は不快を覺ゆるかの状態を言ふなり而して吾人々間は各皆其嗜好を異にするが故に各人感ずる所の快樂苦痛も亦其間非常の差異あるを免れず

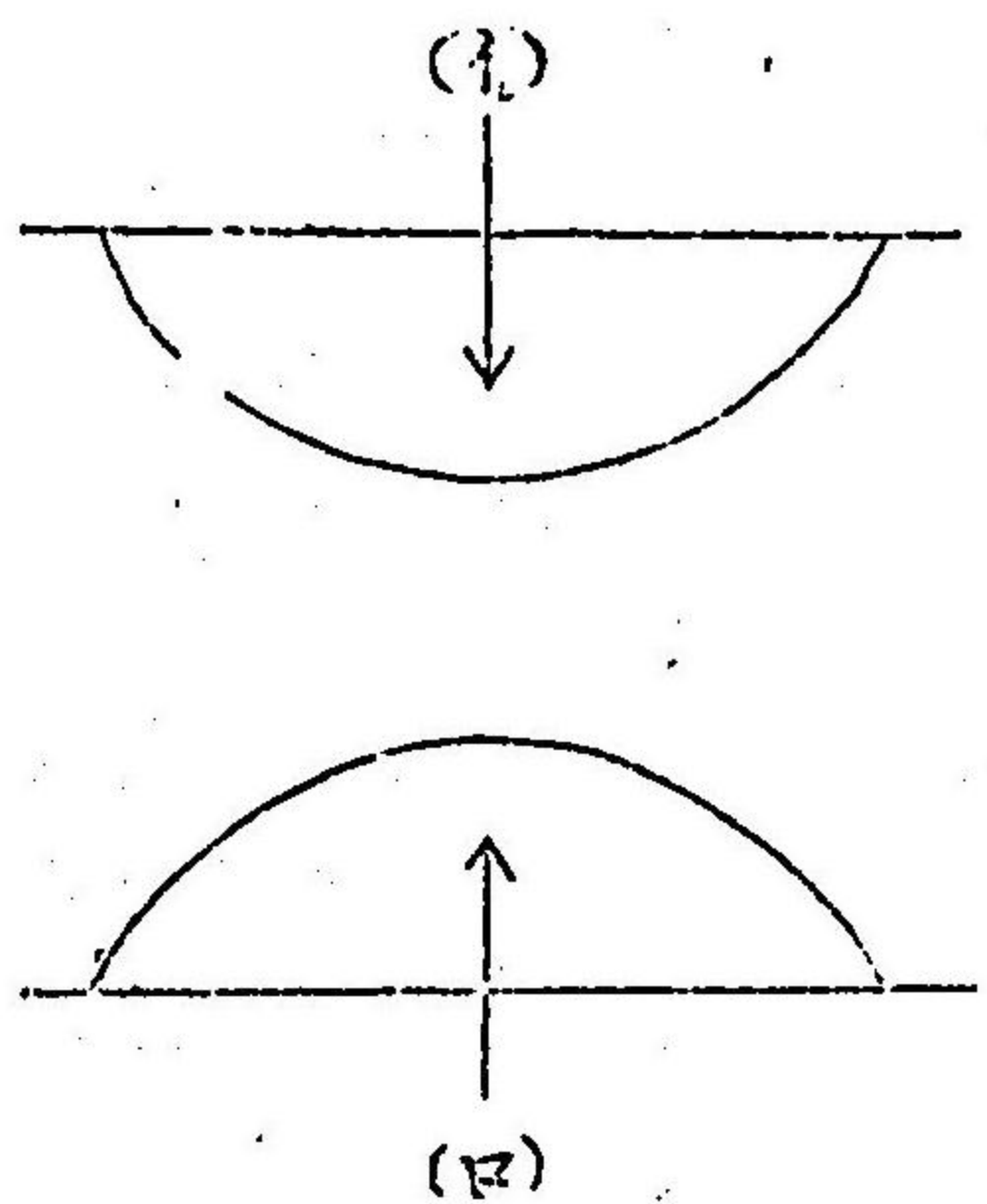
最も單純なる感情は果して如何にして生ずるか予輩は今此疑問に對して答ふる所なかるべからず凡そ吾人の意識中に顯はるゝ心象(或は思想)は常に新陳代謝して少時も休止することあるなし而して新者の將さに舊者を排して意識の闕上に上らんとするや必ず多少の抵抗を受く是等新舊心象の勝敗は全く其鋭鈍強弱によりて分るゝものなり故に其強銳のものは容易に意識の闕上に現はるゝを得べしと雖も若し鈍弱にして力の前者に劣るときは決して其地位を篡奪する能はず是に於てか吾人の意識中には絶

三〇

えす心象の闘争を生ず而して感情なるものまた實に此に兆するなり

若し新心象の闕上に現はれんとするとき舊心象之に抵抗し力相角して容易に二者の勝敗を決する能はざるときは此に苦痛の感情を生ず然れども若し其抵抗止み若くは弱くして新者舊者を排し取りて之に代るを得るときは此に快樂の感情を生ずるなり今圖に表して之を解示せん

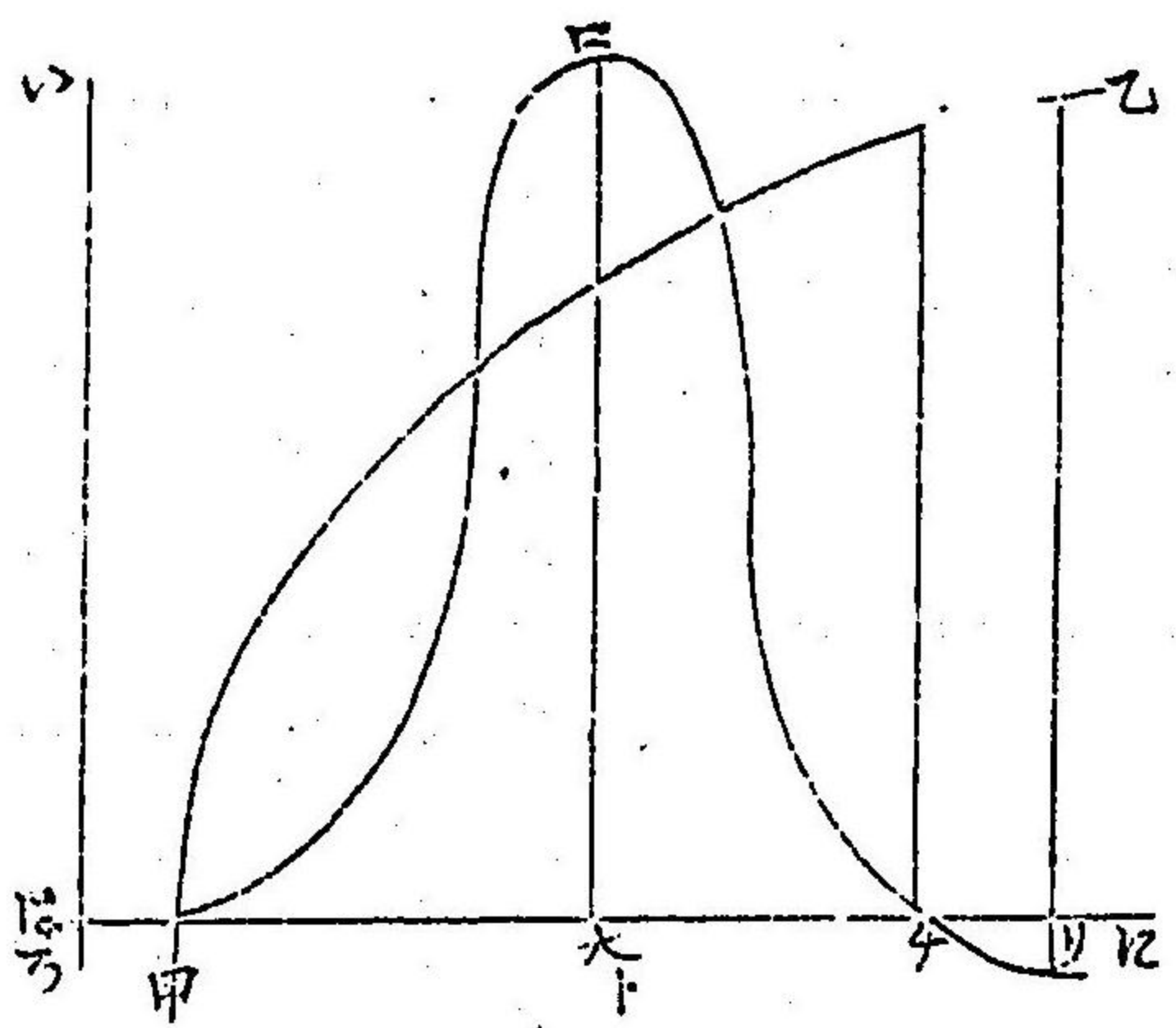
三



圖に示す所の(イ)は舊心象にして(ロ)は即ち新心象なり而して矢は二者か各其力を出すの方向を示すものとす今(イ)が(ロ)に優りて強銳なるときは苦痛

の感情生じ若し(イ)が(ロ)に比して鈍弱なるときは此に快樂の感情を起すべし要するに感情の快樂苦痛如何は心象の容易に運動するか否によりて分るゝものなり

之を概論するに吾人感覺の強弱は刺撃の度によりて分るゝと雖も快樂苦痛の感情は決して之によるものにあらず今圖を以て之を示さん



圖中(は)の方向は刺撃の度を示し(い)の方向は感覺及び感情の度を示す而して(甲)(乙)の曲線は感覺を示すものなり今刺撃(イ)に至るときは始めて此に感覺を生じ刺撃是より進んで(は)の方向に於て増すときは感覺強大となり刺撃の強弱に従て或は増し或は減す然るに感情は(イ)より始まり刺撃(ト)に至りて其最高點に達し感覺は是より益強大となるに係はらず漸次下降し刺撃(イ)に至りて其最低點に達す之を譬へば猶ほ光線の如し光原微弱なるときは吾人の感ずる所亦隨て微弱なるも光力加はるに隨て其感ずる所亦彌大となるべし今實例によりて説かん酒を嗜むもの之を飲むときは或程度に至るまで漸く快樂の感を増加すべしと雖も一杯々々之を傾けて其度を超ゆるときは却て不快の情を催し其極終に苦痛を感ずるに至るべし是れ感覺の刺撃の度に伴て増減するものと太だ差異ある所以あり此に一の注意を要するものあり快樂の感情(イ)より始まり刺撃(ト)に至るときは其最高點に達し之より益増加するときは却て快樂の度を減じて不快に近くものなり而して其漸々進んで刺撃(チ)に至るや快樂の情其最低點に

達し毫も快樂の感を覺えず刺撃尙之より増加するときは即ち苦痛を感ずるに至る然るに苦痛の感は少しく之に異なる即ち(イ)より(ロ)に至りて其最高点に達し之より下りて(チ)に至るときは快樂の感情に於けると正に同一なりと雖も其刺撃更に増加するや苦痛を感せずして快樂に移ることなく唯苦痛なき状態に於て止るものなり是れ快樂苦痛の二感甚だ差異ある所以なりとす

感覺は神身二者間に於ける關係によりて説明すべしと雖も感情は唯心象相互間に於ける關係を以て説明するを然りとす何となれば感覺は元と精神の状態なりと雖も其起らんとするや必ず先づ事体を通じて來らざるべからず而して感情は之に異りて決して身體の作用を要することなく唯心象相互間に於ける關係によりてなるものなればなり

抑も感情の生ずるは刺撃の來ると同時に於てするものにあらず先づ刺撃ありて少時を経而る後快樂若くは苦痛の感を生ず例へば今不意に身体の或局部を打撃するとき先づ其感覺あり少時にして後始めて苦痛の感を

覺ふ時としては感覺毫も障害せらるゝことなくして苦痛の感情のみ消失することあり例へば「クロ、フォルム」を飲みたる病者は足を切斷するも苦痛を覺えず「ヒプロナム」(睡眠に耽る病)の患者は其齒を抜くも毫も苦痛を感ぜざるが如し

又吾人の感覺、思想の聯合及び想像は感情と密接なる關係を有するものなり

例へば觸覺、聽覺、視覺の如き吾人の感覺は感情と關係を有すること甚だ大なり滑油なるものは快樂を感せしめ粗雜なるものは苦痛を覺らしむるが如く又黃鳥の綿蠻たるは爽快を感じ爲めに神をして發揚せしめ蟋蟀の唧啾たるは悲痛を覺へ爲めに心をして沈鬱ならしむるが如し又光線及び色彩の如きは感情に非常の影響を及ぼすものなり赤白色の快樂の情に於ける青綠色の苦痛の感に於けるが如し

思想の連合も亦感情に關係を有すること甚だ少からず即ち吾人の苦痛の感ハ吾人をして嫌忌若くは噴怒の情を起さしむるが如き是れ心象と連合



して生し來るものなり快樂の情に於けるも亦然り  
 又想像は感情の一の強大なる根元なり思想は其附隨し來る無數の小思想により吾人に種々の感情を起さしむ名所舊跡古戰場等が言ふべからざる無限の感情を起さしむるが如き即ち是れなり  
 又快樂の感情を生起するものはそれよりして喜及び愛の念を發するに至るものなり常に吾人に快樂の感情を興ふるが如きものに對しては吾人は自ら之を保護するの傾向を生じ終に斯の如くせざるべからざるが如く感ずるに至る然れども喜の情は受働なり而して愛は喜の活働的となりたる状態なり之よりして又同情同感の情を生ずるに至る苦痛の感情に於けるも亦然り喜怒愛憎等の感情は決して慾望と離るべきにあらず如何なる快樂苦痛も必ず幾分か之を運動に現はさんとするものなるを知るべし  
 吾人の理解力は感情と相反するものなり是れ感情の過度に及ぶときは之を制して以て理論的に處理せんとするに由る故に特に感情の激發せんとするに當りては一般に之を消滅せんとするの傾向を有するものとす

三

感情別論  
 感情の起原

第一  
 第二

例へば歡樂のときに當りては以て其樂とするに足らざることを理論的に示し又悲哀のときに當りては以て其到底避くべからざる事情なることを理論的に現はし以て苦痛の感情の激發せんとするを制するが如し然れども理解力は常に感情を消滅するものにあらず時としては宇宙の美妙を觀じ以て高尚なる快樂の念を興すことあり美術及び工藝の範圍に於ける創造的思想の中に於ては理解力の作用によりてなるもの少からず要するに理解力は感情を調節し吾人の行爲をして中庸ならしむるものなり

三

感情別論

感情は其最も單純なるものより最も高尚なるものに至るまで其類實に多し然れども其起原は之を分て二種となすを得べし

第一 吾人の意識中に於ける心象一般の狀況より生ずるもの  
 第二 特殊なる心象より生じ來るもの

是なり第一を一般の感情と稱す是れ不明了にして吾人が心裡の狀況のみより起るものなり第二を特殊の感情と稱す是れ吾人に明了なるものにし

て外界に其原因を有するものなり  
 一般の感情は甚だ遑漠たるものなるが故に其種類よりいふときは頗る下  
 等のものなり是れ概念の多く相集合するより生し來るものにして論理的  
 に其起原を分析し其物體を指示する能はず又智力の補助なく單に感覺及  
 び其再生より生し來るものなり  
 特殊の感情は一層高尚のものにして單に感覺より生起するにあらず理解  
 力の補助によりてなれる概念に基きて起るものなり高尚なる感情中には  
 眞善美の概念神の概念其他我等に關する感情あり

一般の感情

一般の感情は吾人の心象か意識中に於て互に相控制して凝滯するか或は  
 容易に運動し得る力によりて生ずるものなり換言すれば精神作用が或は  
 活潑なるか或は微弱なるかによりて生ずるなり而して以下の如き場合に  
 於ては快樂苦痛の感情を惹き起すものなり  
 第一 心象の波動的運動の變化の迅速なるか或は遅々たるかの力による

一般の感情

(心象は常に意識中に新陳交代するものにして恰も波の動搖して姑くも底  
 止することなきが如し故に之を波動的運動といふ前者は快樂を生じ後者  
 は苦痛を生ず例へば音樂舞蹈談話等は皆其速なるものにして靜止怠惰單  
 趣等は其遅きものなり

第二

第二 意識中數多の心象一時に相會し同一の力を有するにより互に相控  
 制することあり斯の如き時に於ては吾人は苦痛を感ず若し吾人の決斷に  
 より孰れか其中の一をして強力ならしめ其他の心象を除去するときは茲  
 に快樂を感ず例へば吾人が疑團の中に陥り未だ何れとも決定する能はず  
 るが如きときは苦痛の感情を生じ一旦之を裁決し得るときは快樂を感ず  
 るが如し

第三

第三 問題講義等のとき吾人の知力に於けるよりも一層困難なるものに  
 遭遇するときは吾人は之を解するに當り餘程の腦力を費すにより苦痛を  
 感ず然れども若し一旦其智識によりて之を解釋するの途を得るときは非  
 常の快樂を感ず

第四

第四 之よりして又有力と無力との感を生ず有力とは自己の権力の強大にして何事をもなし得るを感ずるなり是れ快樂の感情を興ふ之に反して無力とは自己の力を以てしては何事をも成就すること能はざるものにして是れ苦痛の感を生ず有力無力の感情は又大に吾人身體の健康と否とに關するものなり

第五

第五 之と相關して勞動休憩及び遊戯の感あり勞動の感情は苦痛を興ふるものにして休憩及び遊戯は皆之を去るものなれば快樂の感情を興ふ

第六

第六 鬭争と平和秩序と混亂及び反省研究等は又之と相應する感情を興ふるものなり是れ下等の感情と高等の感情との過渡に位するものなり以上は心象思想の如何なるものたるに關係なくして起るものなり故に之を一般の感情と稱す

特殊の感情

(一) 下等なる感情

特殊の感情に就ては第一に感覺的的感情なるものあり感覺的的感情の中に就

特殊の感情  
下等なる感情

て最も下等なるは下等の感覺より來るものにして例へば味に於けるか如きは是なり其稍高等なるものは色光線の感情の如し

日光の照々たるを仰ぎ明月の皎々たるを望むときは心中愉快の感情を生じ意氣をして爽快ならしむ諸種の色に於けるも亦之と同じく赤色の人心をして發揚せしめ青色の沈鬱ならしむるが如き以て知るべきなり物理學上より之を論ずるときは其波動の長短及び強弱の度により七色中赤色は最も長さ波動をなし青色は之に反す生理學上よりして之を云ふときは其當時に於ける視神經の狀況及び光線刺撃の關係により心理學上より之を檢するときには是等の色と相連合する小思想により快樂苦痛の感情を生ずるものとす例へば赤色は其波動の長さのみならず又火及び血の色と聯合し青色は樹木深山と伴生するが如し

音響に於けるも亦之に同じ吾人は多少の音響あるを欲す悶然として聲なきは不快の感情を發せしむるものなり

高調の音は色の赫々たるが如く低調の音は其暗々たるに似たり一は人心

をして爽快ならしめ一は之をして沈鬱ならしむ吾人談話の際音聲の抑揚が吾人の感情に影響を及ぼすこと少からざるを思ふときは以て音聲感情の二者甚だ親密なる關係を有するを知るべきなり

其他感覺と再生心象と相混じて感情を生ずるものあり

例へば物體を認識するに於て快樂の情を感じるが如し是れ感官より入り意識中に成れる知覺が再生せられたる心象によりて其力を増大にするを以て快樂の情を感じるなり友を衆人の中に認むるときに如し

之と甚だ相類似して企望及び企望したる事物の生起するときに於ける感情あり

企望とは想像の力によりて將來の事實を預言することなり若し過去の經驗が己れの欲する結果と相反するときには此に不快の情を感ずるに若し自己が企望せし如き結果の實際に生ずるときは吾人は大に愉快を感ず又己れが探索して發見するときの感情あり

こは單に受働的のものにあらず己れの力によりて親しく探求するにより

企望のときに於けるが如く厭倦の情を起すことなし隨て愉快の情また一層甚し成功失敗につきて生ずる快樂苦痛もまた之に類す是れ吾人が思想の中に於て種々思想を運らし得たる結果にして能く實際の事實と符合するときには己れの熟練に伴生し成効なる愉快の情を發し若し之に反するときには失敗の快鬱たる情を來す

(二) 高尚なる感情

高尚なる感情は吾人の意識中に於ける心象相互の關係のみよりして生ずるにあらず其快樂苦痛を生せしむる物體を指摘し又其特別なる性質を指示し得るものなり即ち是等の感情は物體の具ふる一定の性質間に於ける關係の調和と不調和とによりて生ずるなり故に又偶然に生起するものにあらずして必然的に快樂苦痛を感じるものなり

(イ) 知力的感情

こは眞偽及び疑より起る所の快樂苦痛の感情なり  
眞とは吾人が智識の各部分互に相調和して毫も撞着せざるものなり眞は

高尚なる感情

知力的感情

吾人の理解力によりて知らるゝものなりと雖もまた此に愉快の感情存ず故に眞理を發見し愈其深幽の所に至れば愈快樂を覺ゆ然るに若し之に反し己れか研究の半途に於て撞着を發見し之を奈何ともする能はざるか或は困難なる疑問に遭遇して終に疑團の散することなくんば必ず不快の感を抱くものなり

知力的感情の最も單簡なるは判斷に伴生し來るものなり思慮を運らす間は實に苦痛を感ず然れども若し一旦其結論を得るに至れば快樂を感ず思慮すとは一定の事實を決定するに當り同一の證據を有する概念の多少相併て現出し來り果して其孰れを取るべきかを定むるを得ざるものとす蓋し各の思想皆同一の力を有するにより其孰れも他を排斥して意識中に明了に發現する能はざるなり而して其事實にして理論上或は實際上非常に偉大なる影響を有するものたるときは其考ふべき條件も愈數多となり或は愈切要となるにより之を決することも愈困難となり而して苦痛の感情亦隨て大なりとす然れども若し之を充分明了に解釋し得るときは非常の

三〇

快樂を感すべし前の苦痛愈大なれば之を排して得たる快樂も亦愈大なるものなり

之を概論するときは吾人か特に得たる智識を以て能く舊來のものに同化し得るときは快樂を感し若し其間に矛盾の點あるを發見するときは苦痛の感を起す而して其同化にして愈容易に成し得るときは愈快樂の感を生し愈困難なれば愈不快に陥るものなり若し其期に得たる智識にして舊來久しく吾人か信して疑はざりし原理と撞着するときは苦痛の感最も其高點に達す何となれば此時に於ては吾人は悉く其舊來の信を棄て全く新奇なる思想の基本を形成せざるべからざればなり

(ロ) 美學的感情

こは智力的感情と異なり何となれば知力的感情は吾人の理解力によりて之を得るものなるか故に之を感ずるには多少探究の苦痛を嘗めざるべからず而るに此感情には決して斯の如きことあるなし是れ感覺的のものにして何人も眞に能く形態の美なるを觀するときには容易に快樂の感情を起

すに至るものなればなり然れども是れ又感覺的感情と異り何となれば感覺的感情は單に一感官に於ける感覺に附隨し生し來るものなれば到底之と分離すること能はざるも美學的感情は之よりも一層高尚にして決して斯の如き一個體より生ずるものにあらず復合體より生し來ればなり今一例を以て之を解示せんに味に於ける感覺的感情にありては甘味なるものは快樂を覺え苦味なるものは苦痛を感ず而して斯の如き場合に於ける苦樂の感情は感覺的物体即ち甘味なるもの及び苦味なるものよりしてのみ生じ來るが故に決して其感情と物体とは分離すべからざるものなり然るに音樂に於ける美學的感情の如きは幾多の單音相集りて始めて之を生ずるものにして只單一の音のみを以ては生じ得べきものにあらず夫の天然の風光を觀て愉快を感ずるが如きも亦た然り只單に一山一水を觀るのみにしては決して斯の種の感情を起すに足らず人獸草木家屋あり其間に相交錯して始めて吾人の心目を娛ましむべきのみ故に美學的感情に於ける快樂の根本は之を論理的に分析して判明に舉示する能はず蓋し其根

二

本を論理的に舉示すとは只其快樂の感情を構成する元素に歸するに過ぎず而して美學的感情は幾多の物体或は性質の間に存する關係より生じ來るものなればなり故に吾人は壯麗なる建築若くは美妙なる彫刻を見て假令其快樂を感せしむる所以の理を知らざるも尙ほ自ら愉快を覺ふるものなり

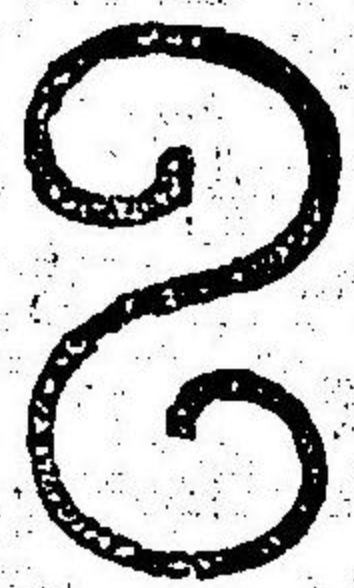
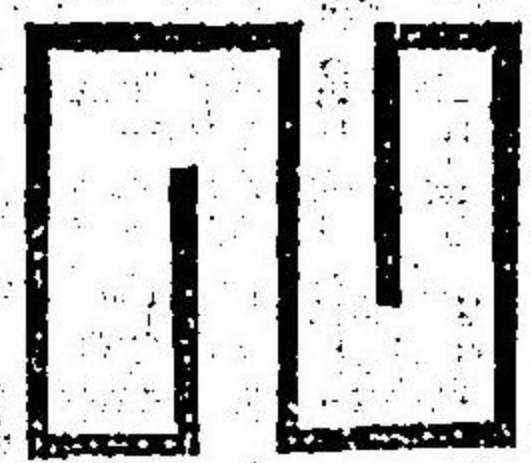
三

吾人の眼目に觸れて不愉快の感情を生せしむるもの之を醜といふ醜は即ち美の反對にして物体を構成する部分互に相調和せざるものなり例へば破毀せる美術的物体の如し然れども凡そ物体は夫の一條の水一塊の土の如く美にあらず又醜にもあらずるもの甚だ多し蓋し美醜の相別るゝは是等の物体が相集合し相錯綜する上に於てす歸一及び復雜の二性は美學的感情を生せしむるに要素なり復雜とは諸種の性質を有する幾多の元素相集合して物体を組織するを云ひ歸一とは幾多の組織元素井然として一定の秩序を有しそは盡く一の中心點に歸向せしめて混亂錯雜の跡を存せざるを云ふ

物体の組織元素單に多種のみにして歸一の處なきもの之を亂雜といふ人類草木車馬家屋等片々たる小畫を集めて一幅の畫中に収めたるが如き殆ど見るに堪えざるなり之に反し毫も復雜なくして只單に一種の元素のみなるもの之を單趣といふ大洋の渺漫たるは田野の茫漠たるが如き只吾人をして厭倦の情を發せしむるのみなり靈妙の美觀吾人をして快哉を喚ばしむるものは實に歸一と復雜の二者各其處を得るに由る

美術の目的は美を生ずるにあり刷新なる創造を以て美を物質上に表出し來り人をして感覺的世界を超脱し高尚なる理想世界に入らしめんとは是れ常に美術家の勉むる所なり感覺的物体は吾人が最終の目的にあらざして尙一層高尚なる目的を達するの手段たることは實に美術の吾人に證する所なり美術は實に人心をして融和ならしむ夫れ風牟嵩高にして一種言ふへからざる氣韻を有する人の如き多くは皆是れ美術を愛するの人なり吾人の品位此に基くを知らば美學的教育の欠くへからざるや自ら明かなるべし美術的の念は又吾人人性の自然に有する所なり感覺的世界以外に

於て更に一物をも知らざる蠢爾たる蠻民と雖も美妙に其耳目を傾くるが如き以て證するに足る  
單純なる美學的感情は物体を構成する部分の相互の關係が愉快なるか將た不愉快なるかによりて生ずるものなり然れども通常なる此種の感情は一物體の中若くは同一の場所に存在する幾多の物体の間に成立する單純なる美學的感情相集合し相調利するよりして生ずるものなり  
二個の平行線、圓狀若くは尖狀の花門、二音間の合調、兩邊圓形なる物体(左圖の如し)詩歌に於ける韻礎字數等は其第一の例なり



草木家屋の形狀、其他音樂、天然の風光、一幅の圖畫等は其第二の例なり  
然れども假令單純なる物体の組織部分許多相集合するも其間混亂錯雜し

て一定の秩序なきが如きは毫も愉快の感情を發せしむるものにあらず  
圖畫若くは天然の風光等にありては樹木岩石動物等の形狀殊に人形の如  
きは其間にありて甚だ美觀を添ふるものなり繪畫彫刻等は如何に天地の  
美を盡したるが如きも到底自然の美に及ぶべきにあらず技術上の美は實  
に技術家の手腕中にあり其欲する所に於て之を造出すべし而して其内容  
たるものは全く理想的のものなり故に技術家たるものは常に此に着目し  
て以て宇宙の万有を觀せざるべからず若し其れ然らざれば到底其神を得  
ること難し而して相集合する所の單純なる感情愈多く相關和するの度に  
從て吾人が感ずる所の愉快も亦愈多く其度を進むものなり是れ即ち美  
の愈高尙となりたるなり

事物の美醜を判すること之を美學的判斷と稱す而して其能力は之を好尙  
といふ

美學的判斷は吾人の感情を表出するに止り吾人の知力の作用によるにあ  
らず真正の美學的判斷は利益嗜好其他社會上偶然の事情を離れて獨立せ

六

ざるべからず美學的判斷はもと永遠にして不變たるべし而るに以上の事  
情の如きは人時若くは場所によりて異り常に變化極まりなきが故に從て  
それより生ずる價格は亦た變轉底止する所なかるべきなり  
流行は美學的好尙と似て甚だ非なるものなり流行は一時世人の注意を惹  
き愛情を喚ぶ故に流行は斷えず變移す而して其流行の當時に於ては如何  
なるものと雖も之を美ならしむるの力を有す然れども一たび其時を失ふ  
に至りてや忽ち真情を暴露し來り人をして其醜を感せしむるに至る然る  
に美學的判斷は正に之に反し假令幾百千年を経過すと雖も其美たる所以  
を變することなし美は實に眞と同じく其胸中先づ幾分の邪念あるときは  
到底眞正に之を味ふこと難し蓋し是れ一抹の黒雲も尙は月明を蔽ふて其  
光を映發せしめざるに同じ

美術を見て發する所の愉快の感情に二種の元素あり其技術の精巧なるを  
見て起るものと其意匠の慘憺たるを悟りて感ずるものとは是なり蓋し此二  
者相待て始めて圓滿の美を爲すものたればなり



例へは世の所謂粗畫なるものは着筆緻密にして能く自然の物体を模寫するよりも寧ろ筆力雄健にして氣款の高尙なるに如かず然るに彼の密畫と稱する如きものは細微漏さすよく自然の物体を擬し得たるを賞し其意匠氣款の如きは措て第二の點となす真正に美術を愛せんと欲するものは先づ十分に此二者を悟了するを要す夫の小兒の繪畫を愛するが如きは決して能く之を味ふものにあらず只其着色の華麗なるか如きを愛するのみ美術鑑定家が能く之を味ひ得る所以のものはよく此等の事情を熟知するを以てなり而して美術に尙ふ所は此二者を共有するにあり然れども若し此二者中其一を擇はんとならば寧ろ意匠の神逸なるを取らざるへからず何となれば是れ吾人に最も高尙の思想を喚起せしむるものなればなり

(一) 道德感情

吾人が道德上の感情を生ずるは先づ道理の力によりて善惡の智識を得其智識よりして始めて之を得るものなり抑も道德上感情の起原は吾人の理想と意志とが相一致するか否かによりて生ずるにあり意志の作用が道德

上の理想と一致するときは愉快の感情を生じ之に反して矛盾するときは苦痛の感情を起す例へば己れの美事と思惟することを實行したるときは後日に至りても愉快を感じ惡事と知りて實行したるときは大に苦痛を覺ゆるが如し  
道德上の感情を大別して四種とす

甲、道德上の一致 (一) 自己の意志作用に於て (二) 他人の意志作用に於て

乙、道德上の矛盾 (一) 自己の意志作用に於て (二) 他人の意志作用に於て

是れなり第一は世人の賞賛等によりて生ずるものにして吾人の心を爽快にして發揚せしむるものなり而して第三は正に之に反す是れ良心の咎責により後悔失望の状態に陥るなり第二第四に於ける感情は其爲したる事の大小輕易に従ひ道德上多少の賞賛非難をなすものなり故に之を約言せば道德上の感情とは善を好み之を樂み惡を惡み之を苦むの情を云ふなり

而してこは皆吾人良心の要求よりして生じ来るものなり。吾人善惡の事情に遭遇するときは必ず此に道德上の感情を生ず而して此感情は吾人が常に善言を聴き嘉行を見るによりて自然に養成せられ得るものなり。家庭教育の必要なる是に於てか知るべきなり。常に善訓を聴くものは自ら斯くなさざるべからざるが如くに感染するに至る惡に於けるも其趣之に異なるなし而して小兒の心身は其發達成人に比して甚だ速かなるが故に人の師たり父母たるもの深く此に注意せざるべからず若し幼時にありて一旦惡行に染ましむるときは所謂習性となりて速かに之を改悛せしむること能はざるに至るべし。善を揚げ惡を排するは是れ最も單純なる道德上の感情なり此單純なるもの或は合し或は變し以て種々の感情を生ず慚愧後悔の如きは自己に對する道德的判斷より生じ謝恩の情の如きは他人の善に酬ひんとするより起り又名譽の情の如きは己れの道德的事業に對し他人の賞贊を博せんとするより起るものなり。

美學的技術の能不能は吾人の義務に關係する所なし然れども其道德的行爲に至りては吾人は必ず之を實行すべき義務を有す是れ此二者の差異ある所以なり吾人は此點に於て此二者の酷だ相類似するに拘はらず後者の前者よりも一層切要なるを見る。例へば人は必ずしも繪畫若くは彫刻を能くせざるべからずと言ふことなし之を能くせざるも一も吾人の義務に於て欠くる所なし然れども吾人は皆善を實行せざるべからず何となれば善は人の眞性にして惡は人性を曲ぐるものなればなり。宗教上の感情は道德上の感情と酷だ相類似するものなり此感情は神の如き感覺以上のもの、存在を考ふるよりして生じ来るものなり。人は萬物の靈なりと言ふと雖も或一方より觀れば甚だ脆弱なるものなり人智未開の時に當りては天變地異に遭遇することに恐怖の念を生じ人力の微にして頼むに足らざるを感ず人智稍進み天地不可思議の現象を觀するときは此に一の無上無限の力を有するものあり宇宙を造り又道德法を

爲せりと考ふるに至る此無上無限の有力者を稱して神と名く神の未來なる觀念よりして此に又雑多の感情を生じ來るなり例へば復讐若くは敬神の念の如し是れ即ち宗教的の感情なり

人智未開の時にありては此種の感情甚だ緊要なり若し人此感情深きときは災厄に遇ふも悠然として驚かず以て人をして感覺的世界を超脱し高尚の精神を有するに至らしむ其然る所以のものは未來の世界在るを信し假令現世にありて不幸に遭ふも只正義に悖戻する所なくんば必ず來世に於て樂果を受くべしと信すればなり

只以上に止まらず此感情は又道德上に裨益を興ふること少からず信神の念厚きときは道德を破らず又義務に省かず蓋し其能く道德を實行する所以は此法を以て神の意志より出づる命令なりとなし従へば神の賞を受け省けば罰を蒙むるものと固信すればなり

心理學終

明治三十年四月五日印刷

明治三十年四月廿日發行

(松本心理學叢書)

發行所

著者

松本文三郎

東京市本郷區追分町三十番地

發行者

井上蘇吉

同 神田區裏神保町一番地

印刷者

仁科衛

同 日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷所

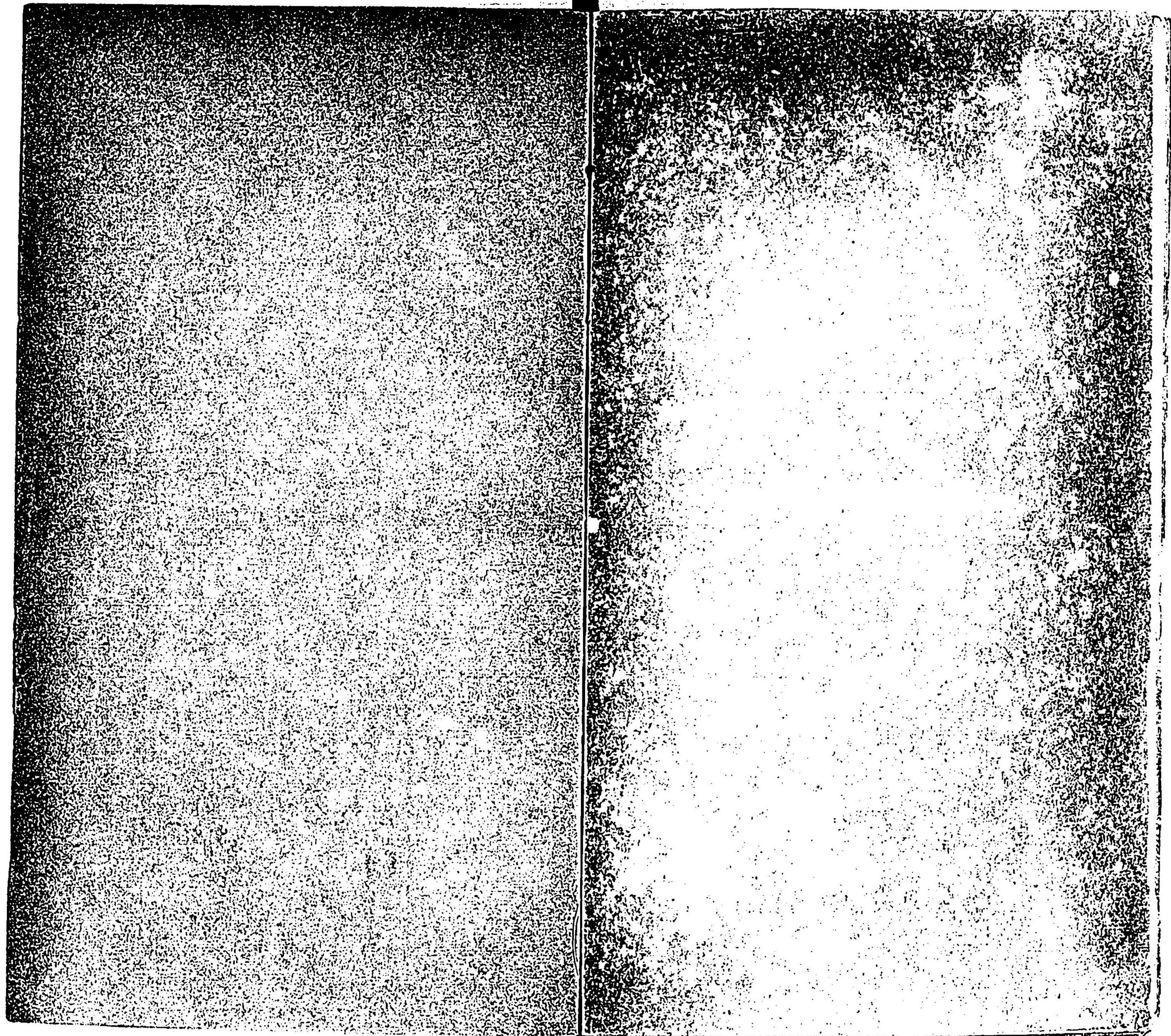
厚信舎

同 日本橋區藥研堀町三十三番地

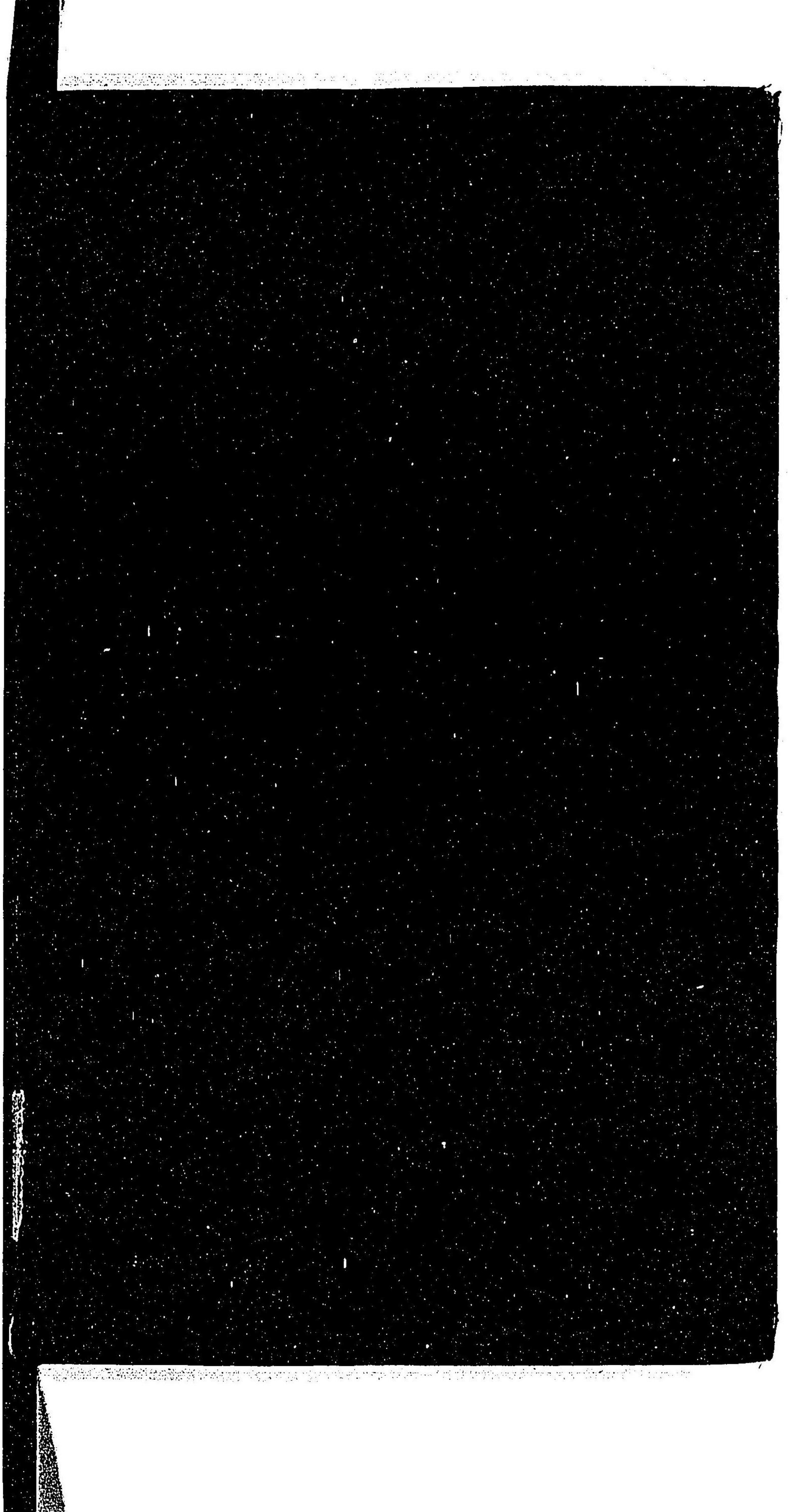
發賣所

敬業社

東京市神田區裏神保町一番地



74  
118





012632-000-1

74-118

心理学

松本文三郎/著

M30

AAI-0192



